

斎藤史の超ジエンダー

スーパード

武下奈々子

「山姥」というディスクリールがある。

日本各地に残る昔話、伝承、民話などを通して私たちの心に刻み込まれた山姥のもっとも一般的な姿は、白髪を風に靡かせて山を走り抜ける老女である。老いた身体に襦袢を纏い、裸足の足が力強く大地を蹴る。深い皺の間の鋭い目、大きな口で人を喰うと。しかし、その一方で、糸繰りの名人、豊かに乳を泌らせる多産な女、その死体を焼いた灰を畑に撒くと不思議な増殖力と豊穡を村にもたらすとも言われている。超自然的な力を持った恐るべき存在として語り継がれ描かれてきた山姥ではあるが、魔女や鬼女や妖怪とは異なり邪悪なイメージがなく、無邪気で大らか、時として滑稽で可愛らしい感じすら抱かせる。恵みと災い、生と死のあいまいな領域に存在しながら、その行動は人の暮しの延長にある。「山姥」とは老いてなお力を失わない者、社会制度の中の記号性から解放された者である。

り、日本の女性の原型的存在であると言える。

斎藤史の作品、ことに『ひたくれなゐ』以降の作品を読むとき、作品の総体の彼方に見えてくるのは、この原日本女性像としての「山姥」である。人であることの宿命を莞爾として受け入れつつ、その宿命と軽やかに戯れているかのような自在さが歌集を重ねることに色濃くなつてゆく。もちろん権力闘争のあわいに倒されて行った者たちへの憐れみ、加えられる楽章の調べから、斎藤史という歌人の姿を通して語りかけてくる原女性の声が聞こえてくるのである。

その声の初めは『ひたくれなゐ』にある。斎藤史は『ひたくれなゐ』において、かつて「密閉部落」「流刑地」と呼んだ信濃の地と和解した。自らの身体を大地の延長として捉え始めたときから、斎藤史その人の声が歴史の流れの中にあるあまたの女性たちの声となり始める。

山坂を髪亂れつつ来しからにわれも信濃の願人の姥
山わたり山山つたひやまうばのめぐりやまざる残執の髪
秋急ぐしぐれに濡れて坂をゆく 行きくれ者のわが姿
娑羅髪

つゆしぐれ信濃は秋の姥捨のわれを置きさり過ぎしものたち

『ひたくれなゐ』に登場する山姥（姥）はその半身をいまだ人間界に置いている。へあこがれて語れば死さへ未来にて解き放たれる機会のごとしへひそかなる無念を噛みて眠る夜や散果てし花はすでに芥ぞんと歌うとき、作中人物としての斎藤史の姿は、人としての宿命を受け入れつつ嬉々として煩惱の山めぐりを続ける能の「山姥」の老女と重なる。超ジエンダーとしての「山姥」の形象は斎藤史自身によって選り取られた極北の女性像であったのだ。

夢果てし女の年齢も過ぎながら花降る下をなほたどりゆく

『涉りかゆかむ』

不しあはせともなく生きてうかうかと春花ひらくをこ
とによろこぶ

ひらひらと峠越えしは鳥なりしや若さばりしや声うす

みどり

遠流無帰われと課ししにあらねどもこの山国に棲みな
れにけり

この世にはまた帰りこぬもののため鈴はふるなり秋よ
もすがら 『秋天瑠璃』

おのれ孤りおのれの毒を食みて生き女いささか酔ふこ
とありし

老いてなほ艶とよぶべきものありや 花は始めも終り
もよろし

けろりと軽く生きて居りたしそのさまのそろそろ似合
ふ頃ではないか

ぐじやぐじやのおじやなどを朝餉とし何で残生が美
しからう 『風翻翻』

薄気味の悪きはまつびるま老女が生草筆り食む

ゆめの浮橋非在にかよふ道あらばこたびこそ人に遅れ
ずゆかむ

ほほゑみは春みづうみの揺れに似てゆるやかに遠き方
よりとどく

斎藤史の描き出した「山姥」は女性という性を越境する存在ではない。この世に渦巻く生活と執着と葛藤を潜りぬけた後によりやく辿り着いたほほゑみの界なのである。人であることをありのままに生きて老い、それでも女であることの自由を示唆する。死の隣りにある生の輝き、悲惨の隣りにある美、いわば自然の始まりの時点に戻る意識の自由を語りかけてくれる存在なのである。

よろづたらはぬことぞなき

目黒哲朗

精一杯自分自身を認めていかなければ暮らしにくいのが長野の風土である。風土を褒め称え、そこに住まうことを無二の喜びとすることが肝要なのである。観光県であるこの地を人は「信州・信濃」と称する。信州産の野菜、信濃の蕎麦、信州の温泉……決して「長野の」ではないのである。それは物質社会に支えられたホログラムのようなものと言えるかもしれない。自然にあふれ、ゆったりとした時間が流れる、幻の故郷。そうしたイメージを先に立たせていつしかその中にさえ完全に住みきってしまう。山に囲まれた貧しい土地を拓き、年毎の冬の寒さにこらえてきた長い月日が作り上げてきた県民性のひとつである。町の有線放送からは今朝も一日の始まりの音楽が流れてくる。県歌「信濃の国」である。

信濃の国は十州に 境連ぬる国にして
聳ゆる山はいや高く 流るる川はいや遠し

松本伊那佐久善光寺 四つの平は肥沃の地
海こそなけれ 物きには
よろづ足らはぬ 事ぞなき

紙幅の都合上ここにすべてを引くことはできないが六番まで歌詞の続くこの歌は長野県下各地の名所旧跡、武将文人の名がふんだんに詠み込まれたいわば「褒め歌」である。小学校の音楽の授業では必ず練習する歌であるから実に多くの長野県人がこの歌を知っている。よく話題に持ち出されるが私もまた、日本全国どの地域にも県歌があり誰もがその歌を口ずさみ、土地の風土を慈しむものなのだとばかり思っていたが、それは長野県特有のものであるということを知っていたく驚いた人間の一人である。

「信濃の国」は明治三十二年長野師範学校の教師浅井冽によって作詞されている。斎藤史が生れる十年前である。疎開のために長野県上水内郡長沼村に住み始めたのが昭和

二十年であるから、その当時すでに広い地域の人々に愛唱されていたことは想像に難くない。「海にこそ接しておらず、新鮮な海産物が手に入るといのではないが、食料に事欠くことはなく、特に足りないと感じるものもとてなにもない」こう歌うことで山国に住まう人々はお互いを励まし、自身を認め、貧困な土地を耕し続けるしかなかったのである。

斎藤史の疎開以降の作品の背景についてはすでに多くが語られてきているが、これら「信濃の国」の歌詞そのものがある意味でその表層をなしていることと見てとれることもできよう。

地平線に大きくのぼる陽も知らず山国人はここに終わむ

『やまぐに』

土耳古青となりたる山の四時過ぎにげにすなほなる食

欲ありぬ

『うたのゆくへ』

冬の神貧しく漁夫も貧し 淡水漁獲組合の旗裂けてつ

くろはず

『密閉部落』

偷楽とは何をいふべきでんがくの美味ならずして名物

なりき

『ひたくれなむ』

氷を割りて奈落を釣ると見てゐるに銀蹴ぬるものを上

げたり

『涉りかゆかむ』

こうした土地の生活に取材した歌は枚挙に暇がない。い

ずれの歌も作者の心の渴望を伝えて隙がないが同時にそこに歌われている人々のたくましさや素直さを描きだしていたり、生命感というものが自然と帯びるユーモアを的確に伝えていたりする点は斎藤史の歌の豊穡を示す特徴であろう。

〈暴れ天竜川〉〈溢れ千曲川〉も老いたりなうとうとして菜の花の黄

『風翻翻』

最新歌集の作品からは過ぎ去った時間を広く見渡す精神世界に立った作者の自在さというものがたつぷりと味わえる。氾濫の歴史を繰り返してきた川の名も今はその河畔に揺れる。「流れ淀まず ゆく水は北に犀川千曲川 南に木曾川天竜川 これまた国の固めなり」いずれの川の名も「信濃の国」にはこのように歌いこまれており、今に伝わる。その表情は斎藤作品から想像されるものと大きく異なる。以前御本人に校歌の作詞の依頼があった時のお話を伺った。その際、当時の教育会の制約が「山河を褒め、よく学べよ」といったいかに常套的な内容を要求するものであったかということをお話してくださったことが印象深い。県歌が歌い継がれる国。地理的な長野とは違った「信州・信濃」という国。戦後の斎藤史作品はこうした土地で作られたもう一つの「信濃の国」である。

史の「湖」

大塚寅彦

あをい眼線に透明な水たたへられちかちかと食む魚棲
みにけり (魚歌)

遠い春湖に沈みしみづからに祭の笛を吹いて逢ひにゆく

(同)

わが頭蓋の罅を流るる水がありすでに湖底に寝ねて久
しき (同)

凍り果てし湖を敲きて何すとや今はねむりたきわが魚
のとも (同)

斎藤史は「湖の歌人」である。それは湖を詠んだ歌が多いということだけでなく、何よりこの作家の高名な第一歌集『魚歌』にある、これらの心象的な湖の歌にこの作者の出発点の核心があらわれていると思うからだ。海でも河でもなく湖であること。湖は海のように茫漠と広くなく、河のように流動的でもない。池や沼のように閉鎖的で淀んでいるわけでもない。一定の広さと深さをもった淡水の世界

であることが、いかにも斎藤史という歌人には相応しい。そしてその湖には淡水魚が棲む。この淡水魚はある意味作者の分身でもあるが、湖底に沈んでいる作者に訪れるともがらでもある。

シェークスピアの「ハムレット」のオフィーリア、その小川を流れてゆく乙女のイメージに詩的な普遍性を見たカストン・バシュラルは「オフィーリア・コンプレックス」という言葉を考案したのだが、若き日の史のこの「水底に沈む自分」のイメージにそれがあてはまらないこともない。

しかしバシュラル言うところの西欧神話的なニンフのイメージとは違った、史独自のものともいえるロマン性がある。そこにはあり、また沈潜した静けさとも言えるものが歌に感じられる。ただ「水は真に実質において死の代わりとなっている。恐怖が緩やかであり静かであるような夢を水

は伝えるのだ。(中略)穏やかな水の中の死はいくつかの母性的特徴を持っている。(中略)ここでは水が誕生と死の両義的イメージを混合している。水は、無意識的記憶と予見的夢想とに充ちた全体なのだ。」(「水と夢」小浜俊郎・桜木泰行訳)というバシュラルの言葉は示唆的である。

なぜ史は「祭の笛」を吹きながら「湖に沈みしみづから」に逢いに行くのか。バシュラルを敷衍して言えば、羊水(湖)の中にいた頃の胎児(魚)としての自分、その生命誕生のイメージは同時に入水による自裁の死のイメージでもあり、笛の音が奏でるのは誕生の祝祭の樂であり同時に自己の葬送の旋律でもあった。

西空のうすれて黄なる映らへば湖も年経るなげきを歌へ

(杳かなる湖)

我は今かく渴けるをいづ方に夕風美しき湖はありなむ

(杳かなる湖)

しかし「魚歌」の後、史は水底に沈む自己像、魚族と一体になる自分を歌うことはない。「遠い春」はますます遠ざかり、ついには湖そのものも眼前にある「杳かなる」ものとなり、また年経るなげきを歌うものとなるのである。

それは「魚歌」が上梓された昭和十五年から未刊歌集『杳かなる湖』の歌が書かれた昭和二十年までの、時代の激変と重なる作者の年齢的な変化ということにもなる

が、それによつて『魚歌』の水底の歌は一回性の青春の輝きを得た。それは、もう二度と還つてゆくことの出来ない母胎のような、失われた甘美な世界なのである。

くろき湖の水を溶びむと潜むときわれに従きくる水死
人ひとり (うたのゆくへ)

凍湖はぐれて薄水片をただよはす湖の辺に置き風化せし遺書 (密閉部落)

ねむりの中にさびしき水の流れくるゆるやかにしてみ
なかみいづこ (涉りかゆかむ)

戦後の苦しい時期、雪深い信州の地の風土性もあるが、湖は暗い、凍りついた姿で現れることが多くなってくる。

「風化せし遺書」を残した水死人とは、あるいは作者自身の中の「死」そのもののなにかも知れない。歌集を重ねるにつれ湖の歌はだんだんと少なくなり、逆に水の現れる歌は多くなつて行く。作者の心の還る場所であつた湖はしだいに作者自身の中に移行してゆき、ついには水そのものとして遍在するようになったのではないだろうか。

後年の自然で軽やかな「見者」の歌に到るまでの史の世界には、死と生の両方を抱えこんだ水というものの、そしてそれを深く湛えた「湖」が大きな存在としてあつたことを確認しておきたい。

『魚歌』はじめのほう

紀野 恵

どうも違う。何かが違う。私はこの頃の若い人の歌の、散文調に馴染めない。短歌に関しては大した読書家ではないのだが、すこしずつ読むそうした歌が、まるで日常のレベルそのままにそこに投げ出されているように思われて仕方ないのだ。

斎藤史さんのインタビュー集『ひたくれなるに生きて』を読んだ。その中に、「日本の地方の隅々で俳句と短歌をやっている人々でも、それがあるから、とにかく日用雑話でない次元の言葉を扱っているわけで、やめちゃったら、その文化は、(と言ってよければ)なくなっちゃうの。」という一節がある。『日用雑話でない次元の言葉』であればこそ、どんな単語、文体であろうと『歌』になるのである。散文調であるのは構わないけれど、あまりに不用意に『日用雑話』のまま、短歌として差し出される作品が多い昨今ではないだろうか。

太陽神^{ソウヤク}がとうもない節の鼻歌をうたひ出すともう春であつた
斎藤史『魚歌』
五九五六の結構な破調でありながら、五七七七七の基本の調子をすこしも見失っていない。現代語を用いつつ、古来の短歌形式の調べに見事に乗ってゆくところは、遙か後年の俵万智の作品を連想させる。

「太陽神」は構えた言葉だが、「とうもない」も「鼻歌」も日用雑話にありふれた言葉である。それらが別の次元の言葉にワープしているのは、ひとつは調べの力である。

敷石道は春のはなびらでもういつぱいパイプオルガンが聞えるさうな
散つて散つてとめどない杏の花の道にまぎれこまうと
ダンテルを着る

すこしずつ五七七七七をはみだしている音が、レース編みのように次の句へ次の句へとなめらかに繋いでいく。もうひとつの力は、実在の、個々に受け取られる雑然とした事物を、太陽神の歌でいうなら「もう春であつた」の「春」、「春のはなびら」、「杏の花の道」のように、高次元の世界の風景へ押し上げ、変換する詩人のエネルギーである。

私はまた、これら『魚歌』の歌を読んだとき、なぜか、海に向いた窓から白い船を見ているシーンを思い起こす。

てのひらをかんだしのやうにかざす時マダム・バタフライの歌がきこえる

という歌がある為じゃあないのだが。

くろんぼのあの友達も春となり掌を桃色にみがいてかざす

アクロバティクの踊り子たちは水の中で白い蛭になる夢ばかり見き

世界地図の上に置きたる静脈の手われわれはみな黄色人種

西洋人が神秘の東洋を目指した時の気分を裏返したような心持ち。今、我々は西洋もアジアもアフリカも見えてしまいい、どこも結局は人間がいる土地に過ぎないとわかってしまった。わかつてしまふ前の心持ち。よその国には摩訶不思議な出来事が日々続き、人々はこの世ならぬ暮らしをしているのではないか。おそらくそれは詩の国かもしれない。また、時間軸においても、将来は不確かでミステリーで花びらがいつぱい降っていて見通せないがきつとうつくしい、そういう気分にあふれている。好奇心と言い換えてもよいが、その気分を作者は現在に至るまで手放しはしなかった。

現代歌人叢書『遠景』には各歌集から抄出された歌が収められている。その抄出作品だけから、ずつと、『魚歌』を最も心寄せる歌集のひとつとしてきた。一冊まるごとの歌を手に入れたのはつい最近のことである。熱心な勉強家読書家の方からはきつと怒られるだろうけれど、私はやはり、基本的には歌は一首で読まれるべきだと考えている。つまり、一首の力で、この本は素晴らしいに違いないと確信させる歌がいくつもある、と言いたいのである。